

第236回「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」（11月）句会記録

俳句の世界で言えば、今年は11月7日（金）の立冬の日から、冬の季節、季語が冬に移ります。私たち「道草」では、毎月第二金曜日に句会を開催することを前提に、日程が決められていますので、日頃お世話をいただいている奥田さんから「11月1日までに季語が冬の句を三句詠み（これまたお世話をいただいている）、森田さんに投句して下さい」という指示を頂戴しました。今月のスケジュールは、11月8日（金）が句会開催日で、11月1日（金）に投句を済ませ、折り返し送付していただいた「投句一覧表」に基づいて選句し、句会でこれを発表し楽しんでおります。皆さんには11月1日には投句を済ませるという、句の詠みにくい暦の回り合わせになったかもしれませんね。

後述しますように、今月は冬のワンシーンを捉えた優秀句が揃いました。これは皆さんの選んだ天賞句が、多くの句に分散することで判明するのですが、今月の場合、天賞を二つ獲得した方が3名、天賞一つの方が9名に分散しました。なお、11月の投句に参加して下さった方は、下述の16名、句会に出席された方は下述の8名でした。

投句にご参加の皆さん（16名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、
手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、
芦尾白然。

句会に参加された方々（8名）

創風さん、和感さん、月草さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、
白然。（8名）

本日の優秀句並びに獲得票数

句会では、皆さんのが優良句として選句された句を発表します（欠席された8名の方の選句は、奥田さんが代読披露して下さいます）。選句された優良句の天賞獲得数は、下述の右辺の記述通り、例えば「天2」とあれば、天賞句として2名の方が投票されており、「☆9」とあるのは、投票数が9票であることを表しています。☆印は最多獲得票賞ということです。獲得票数上位3名を☆印とし、それより下位の方には○印で票数を表示しています。

○『晩鐘の余韻も透ける冬木立』	傘吉	天2☆9
○『神の留守電話のベルのけたたまし』	多佳	天2○3
○『北風にからころ這ふ葉空舞ふ葉』	和感	天2○2
○『熱燗にひとり昭和の艶歌節』	傘吉	天1☆5
○『侘助や思はず漏らす愚痴ひとつ』	傘吉	天1○4
○『冬日向父母の手紙を読み返す』	歌多音	天1○3
○『落葉松をくぐり天空ランプ宿』	栄女	天1○3
○『天鷦絨の時をまとひて枇杷の花』	荻女	天1○2
○『箱ティッシュ積み上げ街は冬構』	晶如	天1○2
○『青の街サマルカンドに薄月夜』	一光	天1○2
○『寺庭の何故か落ち着く花八つ手』	白然	天1○2
○『室の花あさきゆめみし漫画読む』	晶如	天1○1
○『沁むるやう濡らす煉瓦路夕しぐれ』	白然	☆5

手前みその話をするようですが、今の句会方式が定着して約2年が経過しますが、句会

の数が増える度に、ディスカッションの中身が濃くなって来ています。提出された句について、何か一言、ご不審なこと、ご意見があれば、「ひと言」として、皆さんからのご指摘、ご意見をいただきます。ご意見の中で気になりますのは、ご指摘を受けた方のケアレス・ミスといいますか、もう一度、句を読み直していれば、このミスを発見され、修正されていたのではないかと思うことです。やはり何度も何度も句を読み返すこと、舌頭千転は大切ですね。

今月の優秀句（3句）

今句会で最高得票を獲得した句は、傘吉さんの句「晩鐘の余韻も透ける冬木立」が、天賞二つと最多得票賞（9票）を獲得しました。季語は「冬木立」。選句結果の句評にありますように、中七の「余韻も透ける」に「透き通った冬の空気が感じられる冬木立の姿」というところでしょうか。もう一つの天賞評は「なんとなく居住まいを正したくなるような気分になりました」との感想をいただきました。

次に、多佳さんの句「神の留守電話のベルのけたたまし」が、天賞二つ、獲得票は3票でした。「季語神無月（神の留守）」を題材にしたユーモラスな一句が出来ました。「鳴りやまない電話のベルのけたたましさ」というところにユーモアがあつて、読者の共感を得たのだと思われます。

もう一句、和感さんの句「北風にからころ這ふ葉空舞ふ葉」も、天賞二つを獲得しました。リズム感の良い一句になりました。特に上五に据えられた季語の「北風」を転び舞い散る落ち葉や枯葉の表現で、読者の共感を得たと思います。天賞推挙の句評にも「からころという語韻からリズム感のあるユーモアが感じられる」と「落葉の句なのに、楽しい気分にしてくれる」とありました。

先月に引き続き優秀句の解明は、☆2つまでの3句に致します。そして、今回も高柳克弘著「添削でつかむ俳句の極意」という本を参考にして、句の勉強をしたいと思います。

参考 加藤楸邨の句から・・・名人の推敲例（44頁～）

・・・（前略）加藤楸邨は戦時中、大本営報道部の嘱託より、中国各地へ従軍の旅をしました。それゆえに、戦後は戦争協力者として非難されることになります。空襲により家を焼かれるなど、戦争によって大変な辛苦を味わった人でもありました。楸邨はその生涯を通して、俳句で戦争に向き合い続けました。

柿くふや生きて還りし日のひかり

（推敲後）

（中略）時代は日中戦争の最中でした。戦地から帰還した若い友人が食べているのは、柿。日本に帰つて来たことをこれほど感じさせてくれる果物もないでしょう。この句からは、生還できたことを喜ぶ友人の気持ちと、そうした友人の姿を見て安堵する作者の気持ちが伝わってきます。思いあふれた句です。ところが興味深いことに、「うれしい」とか「よろこぶ」といったような感情的な表現は入っていないのです。かわりに「目のひかり」という、その人の表情を具体的に表しています。生気にかがやく瞳が、想いを十全に語っています。こうした身体についての表現は、感情を伝えるのに有効です。さらに「柿」という季語の働きも見逃せません。素朴で暖かみのある色をした柿が、それを食べる気持ちも思わせているのです。

この句は初め、

柿くふや生きて還りし人の顔

（推敲前）

という句でした。「人の顔」もやはり、具体的ではあります。ただ、顔の中でも「目」に焦点を絞った推敲後のはうが、より映像としての解像度が上がっています。戦争を生

き抜いた者としての思いを、目に見えるものを通して訴えている楸邨の作句法に、学びたいと思います・・・（後略）

先日の句会で、創風さんの句「季節鍋俺の出番と箸を持つ」を拝読しました。この句の強いところは中七から下五の「俺の出番と箸を持つ」という具体性にあります。季語「季節鍋」を上五に据えられましたが、より具体的な鍋の名称（例えば「牡丹鍋」とか）を表示されるのは如何でしょうか。上述の加藤楸邨さんの句で言えば、下五の「目のひかり」と「人の顔」に該当する箇所ではないでしょうか。提案させていただきます。

今年も11月の句会を終えましたので、残るところ12月、年の瀬だけです。コロナ、インフルエンザ、遅い台風、豪雨、酷暑、などなど、来年も大変な障害が待ち受けているかも知れません。負けないように、奥深い俳句を目指し、楽しみたいと思います。それではまた12月13日にお会いしましょう。

自然記